

女性保護司の保護観察体験記

少年Aと共に歩んで

保護司としての活動ももうすぐゴールを迎える今、更生への支援や地域社会への協力が十分であったか、反省することが多々ある。

新任研修会終了時、すぐ保護観察対象者を担当することになり、途方に暮れながら帰路についてのが、活動の始まりであった。

中でも、少年Aさんとの出会いは、忘れられないケースである。

母親同伴で訪れたAさんは、母親の多弁の陰で殆ど口を開かず、一見落ち着いているように思えたが……。初回の来訪時、車から降りようとせず、「何でここに来るんだよ」「来たからいいんだろう」と、まるで幼児が母親に甘える姿そのものであった。ある時、「兄貴ばっか。一度も褒められたことねえよ」と呟く。この言葉を糸口と捉え、『良いこと探し』を試みていく。面接直後、Aさんの言葉を詳細に記録し、振り返りと次へのステップの手がかりとした。次第に会話もつながり、心の霧を激しい口調で吐き出すようになってきた。嘘をつかれたり、怒鳴られたり、ぐっと堪えることも多かったが、心を開く大切な時間となっていく。

一方、Aさんの更生には、父母の関わり方が大きいと思われ、家庭内の居場所作りに協力を仰いだ。母親の悩みと共に歩むことも、湿地を歩いているようで非常に難題であった。

一年余り経過していくと、表情も柔和になり、笑顔も垣間見られるようになった。Aさんを通しての母親への連絡も、可能になった。希望が生まれ、ここからという時、時は待たずして20歳の誕生日を迎えた。

いつも面接時には、「同じ目線・傾聴・ぶれない支援」を心掛け臨んでいるが、十分な立ち直りに至らず、今でも思い出す度に力量不足と虚しさを感じている。

最終日に交わした「ありがとうございました」の心を忘れずに、道に迷わず、地域に根を下ろして働いていることを願うばかりである。